



棚

田

ライステラス

第42号 2006.7.5
(季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202

TEL 03-5389-9937 / FAX 03-5389-0078

http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/

全国棚田(千枚田)連絡協議会



宮崎県日南市坂元棚田のかけ干し風景

モノサシを変える

岸 康彦

農政ジャーナリスト

1996年秋に佐賀県西有田町で開かれた第2回全国棚田(千枚田)サミットで、私はパネルディスカッションのコーディネーターをさせていただきました。その時いきりと話題になったのは「デ・カップリング政策」でした。棚田をはじめ条件の悪い地域で農業をしている農家に対し、国や自治体が直接支払いを行う政策です。この願いは2000年度に国の「中山間地域等直接支払制度」として実を結びました。

それから6年、制度はそれなりの成果をあげました。けれども、これで棚田地帯の展望が開けたかといえば、決して楽観できる状況ではありません。それどころか、しゃにむに進められた「平成の市町村大合併」が、むしろ事態を悪化させないかと心配です。

NPO法人棚田ネットワークから最近届いたニュースレターによれば、4月1日現在で、「棚田百選」のある117市町村のうち、半数を超える66市町村の名前が合併で変わったということです。小さい町村が合併の大波に呑み込まれるとともに、市街地からはずれたところにある棚田も、行政から見捨てられる恐れがあります。

経済効率というモノサシで計る限り、棚田の先行きは見えています。棚田のように、カネにはならないが人間にとって大切なものを正當に評価するには、モノサシ自体を変える必要があります。全国棚田(千枚田)連絡協議会は、モノサシを変えるための活動をいっそう強化しなくてはなりません。

インドネシア・バリ島に住んでいる知人が先日、一時帰国しました。彼に聞いたところ、バリでも観光客の来る棚田以外は荒れかけているそうです。バリだけでなく、アジアの棚田地帯の多くが、日本と同じ道をたどる可能性があります。だとすれば、今のうちに棚田を持つ国々と手を組んで、アジアの棚田ネットワークを作れないだろうか——。彼と話しながら、ふとそんなことを考えました。

